

# 『田舎の力が未来をつくる！』

## 『ヒト・カネ・コトが持続するローカルからの変革』

●合同出版 四六判／220頁程度／1600円＋税（予定）

●2017年10月下旬発売予定

●お問い合わせ＝合同出版株式会社（担当＝山林）

TEL: 03-3294-3506 MAIL: info@godo-shuppan.co.jp

### ●内容

新しい動きが、各地で始まっている。地域の資産を徹底的に調査。その文化、歴史、技術など総合力を結集しトータルに売っていく仕組み。そこには景観づくりや、再生可能エネルギーも含まれる。地域の集積でパーソナルが生まれる。どこにもない訴求力ができる。グローバルになったいまだからこそ、ローカルの力が問われる。ボトムアップのマネジメントこそが未来を創造する。

農村観光、農家宿泊、グリーンツーリズム、インバウンド、ゲストハウス、食のテキスト化とワークショップ、地理的表示、地域連携のマーケティング、六次産業、稲作の集約と付加価値づくり、行政・大学・地域連携の人材育成事業、地方移住・定住、離島振興など、各地で行われている実践事例を取り上げる。具体的な現場からノウハウの積み上げこそ地方創生の力となる。

## 第1章 イタリアのアグリツーリズムという産業

イタリアの農村宿泊観光の現地レポートをエミリア＝ロマーニャ州を中心に紹介をする。イタリアでは国際観光を目指して農家の宿泊体験のノウハウを広げ、広域につないで長期滞在をうながし、そのことで経済につながるマーケティングが行われている。

一方でプロモーション事業を、NPO スローフード協会が、地域発で国際社会に展開をしたことで、特産品の売り上げ、輸出、農村観光にも大きな力を発揮したことに触れる。

## 第2章 田舎に若い人を惹きつけるために必要な発想の転換

日本国内でも、イタリアに負けない、国内で発想豊かな活動が地方で始まっていることを紹介する。早くから国際交流を行ってきた長野県川上村。EU、アメリカの先進地の農業を貪欲に視察。山間地の不利な条件にありながら、ケーブルテレビを使い、都市部の市場動向をリアルタイムで把握し、農業にも生かしてきた。

そして筆者が各地で実践してきたのが、食のテキスト化と参加型のワークショップ。その魅力は、地域の食を具体的に学び、レシピの提案までができ、ブランド化にもプロモーションにも有効に機能する。さらに味覚の授業を行うことで、五感を呼びさまし、豊かな表現をうむばかりが、認知症予防にも有効という。

### 第3章 山間地の小さな村を外国人観光客につなげる方法

冬には雪深い地域で条件的には不利と思われていた山村で、農家の宿泊、手料理、風景を組み合わせることで観光客を迎い入れている**山形県飯豊町**をレポート。若い観光協会メンバーが中心に台湾に営業をかけたことで海外客にも知られる存在になっている。

### 第4章 成功する外国人観光客向けマーケティング

足元から大きな変動を始めているゲストハウスを取り上げる。

国内では人口減で空き家が増大している。ところが、海外経験のある若い人、自分たちの暮らしやすい環境を求める人、旅するにはリーズナブルで使いやすいこと、オリジナリティがあること、インターネットでアクセスが楽なことなどがあいまって、新しい観光の動きが急速に広がっている。その中心になるのではと思われるのが民家、倉庫などをリノベーションし、宿泊だけではなく、体験や、風景や、料理など、地域を広範につなぐゲストハウスの存在だ。海外客の集客と日本の国内旅行にも大きな広がりとなっている。

ゲストハウスサイト footprints をはじめ、多くの人に影響を与えたという**東京・下谷の民家をリノベーションした toco.**、**蔵前の Nui**などを紹介。

### 第5章 地域の元気を国内外に発信する生産者たち

農業は、生産だけでなく、販売先、購入先を考えて、出荷する形態に大きく変化をしている。その典型が直売所の存在。

先端のところのひとつが都心部の**横須賀市「すかなごっそ」**。生鮮3品をそろえ、周辺の居住者や人口構成などを事前に調査をして、そこから売り場を形成。消費者ニーズにあった作物を揃えていくという運営を実施している。新しいマーケティング手法が生まれている。

農家が流通・食品店と協議をして、求められる野菜を作付けし、ニーズにあった作物を生産することで農業の経済的基盤を創りだしてきた**群馬県「野菜くらぶ」**。3・11の危機を乗り越え、有機農業で取り組んできたことが海外に通用する食品加工品「糸こんにゃく」が輸出につながる。さらに遊休地に再生可能エネルギーを入れることで、地域全体に持続的な農業を生み出してく活動が注目されている。

### 第6章 エンドユーザーを見据えた集約型の米づくり

稲作を専門に集約農業を行ない経営面もしっかりとしているのが**茨城県龍ケ崎市の有限会社横田農場**。経営面積は140ヘクタールもある。このうち自作地は8ヘクタール。残りは借地だ。横田農場の田んぼは、高齢化により稲作ができなくなった農家の田地を借り受ける形で、じょじょに広がっていったものだ。栽培品種は12種類。用途別に販売先にあわせて作付けをする。

米作りから総菜、弁当、大福、レストラン運営までと、稲作から食べる場までと、商品までを生み出す展開で注目の石川県「六星」。農業の継続的維持、地域雇用、地元消費者の食べる場までから、海外観光客までが喜ぶ特産品づくりまでと進んだ。新たな稲作農業の未来像を提示する。

## 第7章 地域の環境・文化を活かして新たな価値を創造する

**埼玉県さいたま市の「さいたまヨーロッパ野菜研究会」。**レストランも若い人が海外に出かけ学び、国内でイタリアン、フレンチもひろがった。しかし、現地で学んできた料理をつくろうにも、同じ素材の野菜は入手がむづかしい。そこから生まれたのが、レストランのシェフ、若い農家、種苗会社、飲食店向けの流通業者、行政、JA を結んでの、欲しい野菜を新たに市場に生み出すマッチング事業。まったく新しい農業が、地域にもともとあったメンバーが新たに組み合わせを変えることで価値を創り地域全体に経済を生むという事例に焦点をあてる。

**宮城県伊豆沼農産。**宮城県伊豆沼の広大な稲作地帯で、ポークの加工、レストラン、農産物直売所、農業体験、自然景観、環境政策までを視野に置いて複合型で生産、加工、販売をつなぎ地域経済を創りだす新しいモデル事例を取り上げる。

**静岡県「丸山製茶」**のお茶づくりの最前線。目指すはアメリカのナパ・バレーのようなスタイル。価値の高い高品質の商品、景観を生かし食べる場所までがあるシチュエーション。生産から加工、販売までの一貫体制。宿泊までを受け入れる地域を目指す。海外販売までを行い、国際的にも評価の高いお茶づくりが始まっている。

## 第8章 自治体ぐるみで新しい地域ビジネスを創出する

**NPO 離島経済新聞社。**地方のプロモーションで大切なことは、地域の人が現場をよく知って自ら発信できること。全国の離島を連携してWEBとペーパーの新聞づくりのノウハウを生かし、人材創りから教育、商品開発まで、行政、企業を結ぶ、これまでになかった仕組みを築いている。

**和歌山県田辺市「たなべ未来創造塾」。**国が進めている「地方創生」。もっとも大切なことは人材創り。それも地域が主体的となり、地元で活躍できる若い人たちを育てることだ。その実践を始めたのが田辺市。市・大学・政策投資銀行・信金・商工会・地元事業者などが連携し、地域で推薦された若い人たちの事業計画を具体化してスキルを磨き実際の仕事に結ぶことを始めた。しかもインバウンドも明確に方針にあって、海外客誘致にも熱心で、若い人たちの事業・力・ノウハウを横につなぎ、横断的に展開して、将来の経済・雇用・定住につながるというもの。もっとも先鋭的で、今後の地方創生の、おそらく理想的なモデルのひとつとなることだろう。

そして、最後に、地域の活力を生み出したところの共通点を洗い出し明示する。

## 著者プロフィール

文：金丸弘美（かなまる ひろみ）

食総合プロデューサー。食環境ジャーナリスト。「食からの地域再生」「食育と味覚ワークショップ」「地域デザイン」をテーマに全国の地域活動のコーディネート、アドバイス事業、執筆活動などを行う。また各行政機関と連携した食からの地域創り、特産品のプロモーション、食育事業のアドバイザーとして活動。とくに地域調査を行いテキスト化し、参加型で食べ方までを提案をするワークショップを行いプロモーションまでもっていく活動が好評。各地で実施されている。

総務省地域力創造アドバイザー、内閣官房地域活性化応援隊地域活性化伝道師。

小笠原諸島振興開発審議会委員(国土交通省)、新潟経営大学特命教授、明治大学農学部食料環境政策学科兼任講師、フェリス学院大学国際交流学部非常勤講師、学校給食等地場食材利用拡大委員会委員（農水省）、ライターズネットワーク相談役、茨城県常陸太田市大使、高知県観光特使、山形県総合政策審議会委員、香川県さぬきうまいもんプロジェクト実行委員会委員、特定非営利活動法人発酵文化推進機構特任研究員、日本ペンクラブ会員ほか。

著書に『ゆらしい島のスローライフ』（学研）、『創造的な食育ワークショップ』（岩波書店）、『田舎力 ヒト・物・カネが集まる5つの法則』（NHK 生活人新書）、『「地元」の力 地域力創造7つの法則』（NTT出版）、『幸福な田舎のつくりかた：地域の誇りが人をつなぎ、小さな経済を動かす』（学芸出版社）、など多数。『田舎力』は8年連続アマゾン地域経済ベストセラー1位。15刷りのロングセラーとなる。メディア掲載65。「地方創生」のテキストとなる。

新刊に『里山産業論 「食の戦略」が六次産業を超える』（角川新書）、『タカラは足元にあり！ 地方経済活性化戦略』（合同出版）がある。